

Aで総菜を自動発注

来店客数予測、欠品防ぐ

中部フーズ

バローホールディングス(HD)子会社で総菜製造販売の中部フーズ(多治見市)は、人工知能(AI)を活用した総菜の自動発注を本格的に始めた。気象データや人流データなどから来店客数を予測する仕組み。消費期限が短い総菜の値引きや廃棄、欠品を防ぎ、食品ロスの削減効果で収益の向上を図る。

(松浦健司)

バローで本格導入

同社が総菜部門を運営するスーパーマーケットのバ

ロー76店舗で6月から導入した。今後はAI予測の



発注する店舗の従業員(バローホールディングス提供)



AI自動発注を導入後の店舗の総菜の陳列(同)

精度の向上を図りながら、2025年3月期中にバローの242店舗に展開する。

自動発注は、ソフトバンクと日本気象協会が共同開発したAIの需要予測サービス「サキミル」を活用。

気温や日射量、風速、湿度といった気象データに加え、ソフトバンクの携帯電話基地局からの人流データ、バローの店舗の販売時点情報管理(POS)データから、総菜の発注量を自動で提示するモデルを構築した。

1～5月にバロー31店舗と多治見本社工場で事前検証を実施した際、店舗の利益が5%増え、発注の作業時間が27%減った。発注はこれまで、店舗の従業員が経験に基づいており、余った商品の値引きや廃棄などが課題となっていた。発注作業の負担も減らすこと

で、人手不足の緩和にもつなげる。

産業界の気象データ活用
に詳しい岐阜大工学部
(気象学)の吉野純教授
は「気象データはコンビ
ニや電力の需要予測、ス
マート農業、雨の日に料金を

割り引く観光地など、さまざまな企業で導入されつつある」と説明。「今まで大手企業しか活用していなかった。もう少しシステムの価格が下がれば、県内の中小企業でも活用が広がる」と語った。